

# 人間観の未来

## The future of the notion of human

馬場 淳 (和光大学)

Jun Baba (Wako University)

科学技術のめざましい発展と地球環境の危機は、人間をモノ、動物、環境から切り離し、特権化してきた従来の(人間中心主義的)世界認識に根本的な転換を迫っている。この「後」にくる潮流はさしあたりポスト人間中心主義(post-anthropocentrism)、すなわち機械や動物、地球など、人間以外のエージェンシーを認め、人間とともに、ときに融合し、生成変化しながら世界をつくるという——人間中心主義を相対化する契機に満ちた——思潮としておこす。新型コロナウイルスのパンデミックも、こうした転換にさらなる現実味を与えたに違いない。本企画セッションは未来を考えることだが、ポスト人間中心主義的状况はすでに私たちがその最中にいるところのものである。

R・ブライドッティによれば、「ポスト人間中心主義の論点は、科学技術論、ニューメディアとデジタル文化、環境保護と地球科学、遺伝子工学、神経科学とロボット工学、進化論、批判的法理論、霊長類学、動物の権利、そしてサイエンス・フィクションを徴集する」(『ポストヒューマン——新しい人文学に向けて』フィルムアート社、91頁)。本発表では、すべてとはいかないが、これら広大な領域も参照しながら、「これまで」と比較するかたちで、現在進行中の「これから」の人間観を考えてみたい。

従来の人間観は、ホモ・エコノミクスやホモ・ルーデンスなど、人間の特徴——人間がいかに機械や動物などと異なるのか——に主眼が置かれ、モノや動物などは(人間の)道具／対象として視野から外れている。そもそもヨーロッパにおいて、中世までの神中心主義に代わる人間中心主義は、近代社会の成立と発展を支えてきた。その特徴は、二元論(自然と文化、物質と精神、人間と非人間、主体と客体など)を前提に「世界」を設計するところにある(B・ラトゥール『虚構の近代——科学人類学は警告する』新評論)。人間観もこうした前提にからめとられてきたといえるだろう。

一方、これからの(=ポスト人間中心主義的な)人間観は、ポストヒューマン、ネオ・サピエンス、サイボーグ、分人(ディヴィデュアル)などといった標語で表象されているもので、前段の二項対立をはじめ、時間と空間、社会的区分といった差異を解消／横断していくような一元論を特徴とする。そこでは、非人間の平等主義的プレゼンス、諸存在の融合や生成変化が重要なロジックとなる。人間を中心に据えてきた社会および学問は、これに対応したオルタナティブなデザインが求められることになろう。

とはいえ、アイデンティティと差異の政治、身体性など、人間の定義にかかわる多くの問題がつきまとっている。そもそもポストヒューマン論のすべてが人間中心主義から「脱出」しているわけでもない。最後に、こうした問題や限界についても指摘したい。